The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『豊饒の海』『春の雪』の英語翻訳 : 百人一首48番49番の訳出について
Author(s)	寺浦, 麻由
Citation	大阪大学言語文化学. 2020, 29, p. 57-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77117
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『豊饒の海』『春の雪』の英語翻訳

―百人一首 48 番 49 番の訳出について―*

寺浦　麻由**

キーワード：日英翻訳、引喩、百人一首

English Version of the *Hyakunin-Isshu* Poems No. 48 and No. 49 in *Spring Snow*（The First Book in *The Sea of Fertility* Tetralogy）

In this paper, I explore the English version of Mishima Yukio's *Spring Snow*（*Haru no Yuki*, 1969）, the first volume of his tetralogy *The Sea of Fertility*（*Hojo no Umi*）, translated by Michael Gallagher. This is a love story of Kiyoaki Matugae, the son of a rising nouveau-riche family, and Satoko Ayakura, the daughter of a fallen aristocratic family. Donald Keene, a prominent scholar of Japanese literature, criticized Gallagher's translation, arguing "the poetic expressions of the original are flattered out, presumably to make things easier for the Western reader." However, there have been only a few research studies conducted through analyzing the text.

This novel is full of allusions to Japanese classical literature. Especially, I would like to focus on two poems included in *One Hundred Poems from One Hundred Poets*（*Hyakunin-Isshu*）inserted in the work, which convey the above-mentioned characters' feelings in the entire novel by allusion. There are remarkable similarities in the motifs of the poems and these two characters' feelings. After being informed of the marriage of Prince Harunori and Satoko, Kiyoaki realized that he lost Satoko. At that moment, he found a scroll used for penmanship practiced by Kiyoaki and Satoko in their childhood, in which the *Hyakunin-Isshu* poem No.48 was transcribed by Kiyoaki and No.49 by Satoko, and that made him feel nostalgic. Both of these poems are interpreted as expression of the grief of one-sided love whose imagery is based on waves, rocks, winds, and fires. Although these natural motifs are beautifully used in the ST（source text）, Gallagher translated these poems using easy expressions in order to make them more readily intelligible to the Western readers.

---

* English Version of the *Hyakunin-Isshu* Poems No. 48 and No. 49 in *Spring Snow*（The First Book in *The Sea of Fertility* Tetralogy）（TERAURA Mayu）

** 大阪大学言語文化研究科博士後期課程

First, I attempt to analyze how these poems work in the ST as allusion. This paper also illustrates how Gallagher's translation of the poems has changed the original description of their relationship. Secondly, by comparing other translations of No.48 and No.49 with Gallagher's translation, I point out what is missing in the TT（target text). Lastly, I propose the importance of the literary translation of allusion from the point of view of dynamic equivalence, a notion proposed by Eugene Nida.

1 はじめに [1]

本稿では三島由紀夫『春の雪』（1969）のマイケル・ギャラガーによる英語翻訳 *Spring Snow*（1972）を考察する。三島は本作で百人一首 48 番、49 番を引喩 [2] として用い登場人物である松枝清顕と綾倉聡子の心情を示した。そこで本稿では英訳版の百人一首の訳出を考察し原作で示された多義的な恋愛関係の奥行きがどの程度保たれているのかを検討する。

1.1 事例研究対象『春の雪』について

作品の文体に関して三島は次のように述べている。「…古語も、『春の雪』なんか殊にわざと技巧的に使っておりますけれど、あれは王朝の小説を復元した形の小説ですから、古い言葉をわざといっぱい使っているんです。ふだん使わない言葉が随分出てきます。」（三島, 2017:19）三島は古語の使用のみならず古今和歌集などの古典の引喩により『春の雪』を王朝風の恋愛小説に仕上げた。本稿では、日本古典の世界を創造し、登場人物の心情を重層的に表現するために引喩された百人一首について考察する。

1.2 先行研究と理論的枠組み

この作品の英語訳の評価は芳しくない。[3] ドナルド・キーンは "…minor errors crop up on every page, and the translation as a whole is marred by a wordiness not justified by the original. Sometimes, too, the poetic expression of the original is flattened out, presumably to make things easier for the Western reader."（Keene,1972:59）と批判した上、百人一

---

[1] 査読者の二人の先生方に丁寧なご指導をいただきましたことに御礼申し上げます。認知レトリック論研究 B の授業で渡辺秀樹教授に配布していただいた島津（1996）に触発されたのが本稿執筆の発端でした。感謝申し上げます。また、ご丁寧にご指導くださいました伊勢芳夫教授、大森文子教授に感謝申し上げます。同大学院生の岡部未希さんには本稿の執筆にあたり有益なご助言をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

[2] 引喩（allusion）は、有名な一節を暗に引用しながら独自な意味を加えることによって、重層的な意味をかもし出す法である（瀬戸, 2002: 巻末）。

[3] 詳しくは Ryan（1974), Larry（2015）を参照のこと。

首の訳出は “minor disasters” の一つだと述べた。[4] その発言の真意は不確かであるが、百人一首の訳出には何らかの問題があったと推察される。本稿は理論的枠組みとしてST[5] と TT[6] のテクスト等価を定義した Nida（1964）の「動的等価（dynamic equivalence）」（以下 D-E）を参照する。Nida（ibid.）によれば「受信者と伝達内容の関係は、実質的には、原語の読者とその伝達内容間に存在したものと同一でなければならない」（ナイダ, 1973:232）。ST の意味と形式に即し、逐語訳的に訳す「形式的等価（formal equivalence）」（以下 F-E）に対して D-E では ST と TT の語がそれぞれの読者に対し同等な効果を上げることを念頭に翻訳者が調整を加える。字数の多くない和歌であっても ST 読者の受け取る情報が多分に存在する。その情報による原句の理解は TT 読者にも同様にもたらされるべきである。

1.3 研究課題

本稿の研究課題を以下のように設定する。

RQ1. 和歌を引喩（allusion）として用い、恋愛関係の奥行きを理解するという読者の反応にギャラガー訳（以下 G 訳）でも等価があるだろうか。

RQ2. 引喩としての動的等価が達成された、G 訳以上の訳出は存在するだろうか。

RQ1. に関して詳述する。ST 読者は百人一首の引喩により両者の心情を多様に解釈できる。和歌に描かれた恋愛感情と主人公たちの感情が同質のものだと小説の地の文から明確に断定できる記述は三島の原文にはない。しかし ST 中にこれらの和歌が紡ぎ出す恋愛と清顕や聡子の恋愛との対応関係を想起させる記述が散見される。つまり ST 読者が 48 番や 49 番が引喩であることを察知する仕掛けが存在する。その仕掛けについては 2.1 節と 3.1 節で詳述する。百人一首の文化背景を持ち得ない多くの TT 読者にとって両者の心情の深い理解は和歌の翻訳の質によって影響を受ける。和歌を引喩として用い恋愛関係の奥行きを示す ST の効果が TT ではどの程度保たれているのかに焦点を当てたい。

RQ2. については、百人一首の英訳は完訳され出版されたものだけに絞っても 26 訳ある（カーロイ, 2018）。その中でも比較対象としてとして次の①②③を扱う。①ウィリアム・ポーター訳（1909）[以下 P 訳] ②本多平八郎訳（1956）[以下 H 訳] ③ピーター・マクミラン訳（2017）[以下 M 訳] である。これらは引喩としてではなく独立した短歌

---

[4] “The translations of other passages, such as the elaborate menu for the banquet of the Cherry Blossom Festival, or the poems from the Ogura [not Kokura] *Hundred Poems* by a Hundred Poets, are minor disasters, ...”（Keene,1972:59）.

[5] ST: source text 起点テクスト（原文）

[6] TT : target text 目標テクスト（翻訳文）

として翻訳された訳だが、G 訳を考察するために、これらの訳との比較が有益であると考える。8-6-8-6-6 五行詩形の P 訳、脚韻 abab 四行詩形の H 訳、自由訳の M 訳を対象とし異なる背景で訳出された英訳を比較する。斎藤秀三郎訳（1909 年）、Frank Watson 訳（2012 年）も比較する材料として取り上げる。これらについては、2.2 節、3.2 節の分析に際し、適宜引用して考察の手掛かりとする。必要がある場合に Vinay,J.-P.& Darbelnet,J.（1995）が提唱した訳出過程で生じる問題に対処する方略[7]のうち、どの方略が用いられたのか明記する。

1.4 百人一首の巻物の挿話部分について

『春の雪』は維新の功臣を祖父に持つ松枝家の嫡男清顕と公家の綾倉伯爵家の令嬢聡子の物語である。松枝侯爵は自分の家系にはない雅に憧れ、綾倉家に清顕を預ける。清顕は、綾倉家の令嬢で二つ年上の聡子に恋をする。しかしお互いに恋を打ち明けぬままでいた。ある朝、聡子は清顕を雪見に誘う。そこで二人は接吻を交わし想いを確かめ合う。しかし聡子と桐院宮治典王との婚姻の勅許が下り二人は引き裂かれる。喪失に心を痛めた清顕は、ある巻物を見つける（24 章）。その巻物には昔二人が手習いでかいた百人一首 48 番、49 番が記されていた。悲しみに暮れる清顕に、その巻物に触発されるように聡子と過ごした思い出が蘇ってくる。以下は本稿で取り上げる 24 章の挿話部分である（太字は筆者による）。

ST	TT
藤原忠通の法性寺流に流れを発する古い和様の書を、能書の伯爵は熱心に教えてくれたが、あるとき習字に飽きた二人を興がらせようとして、巻物に小倉百人一首を一首ずつ交互に書かせてくれたのが残っている。源重之の「**風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物をおもふころかな**」という一首を清顕が書くと、そのかたわらに、大中臣能宣の「**みかきもり衛士のたく火の夜はもえ昼は消えつつ物をこそ思へ**」という一首を、聡子が書いている。（205）[8]	Count Ayakura, who was a superb calligrapher, had taken great pains to instruct the two children according to Tadamichi Fujiwara's Hossho Temple school of writing. Sometimes, when they tired of their usual exercises, he had rekindled their interest by letting them take turns copying verses from the Okura One Hundred Poets card game onto a scroll. Kiyoaki had written a verse by Shigeyuki Minamoto: **I feel the wind's keen force As waves break over rocks Worn down by loneliness I dream of days gone by.** Below it Satoko had written a verse by Yoshinobu Onakatomi: **When day gives way to night And guards kindle fires The thoughts of other times Come alive within me.**（167）[9]

[7] Vinay,J.-P.& Darbelnet,J.（1995）は訳出における個別の問題に対し、個別の対応を定義した翻訳技法をまとめ、異文化要素に対する訳出方法を分類した。翻訳技法に対する訳語はマンデイ（2009）を参照した。
[8] 三島由紀夫（2012）『春の雪』新潮社 本文中の括弧内のページ数はすべてこの版に拠る。
[9] Mishima,Y.（1990）*Spring Snow.*New York:Alfred A Knopf,Inc.First Vintage International Edition.TT 括弧内のページ数はこの版に拠る。

2 48番歌について

2節では清顕が書いた48番歌「風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物をおもふころかな」について考察する。島津（1969:108）によれば現代語訳は「あまりに風がひどいので、岩にうちあたる波が砕けるように、あの女は平気でいるのに、私だけが心もくだけるばかりに思い悩んでいるこのごろであることよ。」となる。まず、2.1節では48番歌の引喩としての役割を考究する。2.2節では2.1節で述べた『春の雪』における48番歌の意味を踏まえつつ、4つの英訳を比較検討する。

2.1 清顕と聡子の恋愛関係と48番歌の関係性について

2.1節では48番歌と清顕と聡子の関係性を岩、波、風に分けて考察する。48番が挿入されたのは、24章のみだが、注意して本作を読めば48番の恋愛関係が小説全体においての清顕、聡子の恋愛関係の理解を助ける引喩として働くことに気づく。

(1) 48番の岩：48番では、岩を比喩として冷然な女が描かれる。勅許後の逢引を重ねる聡子は冷静さを失わない。34章鎌倉での逢引で、恋の終わりを意識しない清顕に対し、聡子は恋の引き際を心得ている。友人の本多は、聡子にどうやってこの恋に決着をつけるつもりか尋ねる。聡子は、『「……いつか時期がまいります。それもそんなに遠くはないいつか。（中略）こんなに生きることの有難さを知った以上、それをいつまでも貪るつもりはございません。」』（301）と答えるのだった。

物語後半、46章で門跡は、出家を決意し剃髪をせがむ聡子に後悔はないのかと尋ねる。『「後悔はいたしません。この世ではもうあの人とは、二度と会いません。お別れも存分にしてまいりました。ですから、どうぞ……」と聡子は清い、ゆるぎのない声で言った。』（407）剃髪を決意する聡子の様子には、確固とした覚悟が見られそれは動揺を隠せない清顕と対照的である。48番の岩が、状況を冷静に俯瞰しつつ、恋の去就を判断する聡子の姿や出家に対する断固とした聡子の意志を象徴している。

(2) 48番の波：次に清顕と波との類似性についてまとめたい。清顕は、二つ年上の聡子に終始翻弄される。例えば、聡子に縁談が持ち上がったことを仄めかされた時には「『…あの人の目的はただ一つ、僕の心を波立たせ、僕を苦しめることに尽きていた。…』」(56)と水の心象で、聡子に対する困惑を吐露している。

48番歌について鈴木（1977:146）は「砕け散る浪をわが身になぞらえたものであるが、それは同時に作者が、しきりに女に言い寄る趣きをも暗示的に表現しているものであろう」と述べている。清顕も寄せては返す波のように聡子を翻弄する。例えば聡子が数多の女性のうちの一人だと告げる嘘の手紙を出す。さらに52章では、聡子がいる月修寺に出向き面会を試みる。そして雪の中待ち続け、病をこじらせ、20歳で一生を終えて

しまう。清顕はこのように連続的に聡子に働きかけ、48 番歌の波のように身も心も砕け散ってしまう。

(3) 48 番の風：三島の緻密なテクストには 48 番の残りのモチーフである「風」も織り込まれている。本作で清顕の身体は「旗」、感情は「風」に喩えられる。このメタファーを基盤とし、清顕は物語冒頭で「自分にとってただ一つ真実だと思われるもの、とめどない、無意味な、死ぬと思えば活き返り、衰えると見れば熾り、方向もなければ帰結もない「感情」(21) のため、「旗のように風のために生きる」(21) ことを誓う。清顕が自由な風のように感情の赴くまま危険な行動に身を投じるまでには次のような流れがある。物語は前述 24 章の 1.4 の百人一首の 48 番の挿句から「彼は再び幼ない聡子と互みに書いた手習いの百人一首をとりだして眺め、十四年前の聡子の焚きしめた香の薫りがまだ残ってはいはしないかと考えて、その巻紙に鼻を寄せた。するとその黴の匂いともつかぬ遠々しい香りから、一つの痛切な、世にも無力で同時に不羈な、彼の感情のふるさとが蘇った。」(217) という記述に続く。そしてさらに前述、24 章百人一首の巻物の挿話直後、25 章で「『僕は聡子に恋している』」(218) という確信と繋がる。換言すれば清顕は波を鼓舞する風をモチーフとする 48 番に触発され蓼科を脅迫し聡子と逢瀬を重ねるという大胆な行動にでるのだ。

物語後半 50 章で、聡子の喪失に絶望し清顕は心中をこう吐露する。『…歌の原素となるような流麗な悲しみはどこにもなく、体内をただうつろな風が吹いていた。』(432) と。威勢よく息巻いていた清顕が感じていた烈風は止み空虚な風が吹く。48 番歌を引喩の原典として理解すれば清顕を行動へと突き動かす風が弱体化したことに気づくだろう。

2.2 48 番歌の比較

2.2 節では 48 番の他訳と G 訳を比較する。比較に際して問題となるのは ST における隠喩の訳出である。D-E の考え方を適用すれば ST 読者に許された 48 番の恋愛関係の理解、清顕と聡子への連想を TT 読者も享受しなければならない。百人一首に慣れ親しんだ ST 読者は上句の自然描写が下句の主題へと続く序詞になると理解できる。そして少し注意深く読めば、48 番の意味内容に着想を得て作品全体に渡る清顕と聡子の恋愛関係を理解することも可能だ。百人一首を文化背景に持たない TT 読者はどうだろうか。Nida は起点言語で暗示的に伝達された重要な意味要素は目標言語では明示的に示される必要があるとして「暗示的表現から明示的表現への拡大[10]」(Nida,ibid.) を調整方法の一つとして提案した。それぞれの翻訳者は 48 番における隠喩の訳出にこの調整方法を

[10] 訳語はナイダ (1973) を参照。

用いている。

2.2.1 48 番　ギャラガー訳

ST	TT
風をいたみ	1 I feel the wind's keen force
岩うつ波のおのれのみ	2 As waves break over rocks
砕けて物を	3 Worn down by loneliness
思ふころかな	4 I dream of days gone by

48 番の訳出では波・岩・風の関係性を TT 読者に示す必要がある。まず波の訳出について考える。波が女に果敢に挑む男を暗喩している 48 番の原句に対し TT では特に波の性質を補足していない。後に言及する他訳では、波を喩とする男の性質を「波」に形容詞を加えたり「砕ける」に副詞を修飾したりすることで説明している。さて次に「風をいたみ」の訳出だが主体 "I" を訳出し、「烈風を感じる」という文法構造に変えている。2.1（3）で言及したように、「感情（風）」が「清顕（波）」を鼓舞する原作において風と波の因果関係は重要である。もう一度確認すると本作品の引喩の機能は次のようになる。「感情（風）」に鼓舞されて「清顕（波）」は「聡子（岩）」に打ち付ける。従って風が波を誘発する因果関係を読み取ることができない G 訳には ST との等価関係がない。

次に注目したいのは「くだけて」の訳出 "worn down" である。逆訳すれば「波が岩の上で砕けてその力が衰えるように私も孤独のために疲れ切って過ぎ去った日々を思う（拙訳）」となる。G 訳では荒波が砕ける様子のみならず波濤の弱化とともに " I " の精神的な疲労を描いたようだ。直前の ST「恢復期の病人がおそるおそる不養生をするように、清顕はもはやそれによって心を動かされぬことを試すために、ことさら聡子の思い出にかかずろうた。」（204）と一貫性があるが孤独のために疲れ切ったのでは誤訳に近い。「おのれのみ」は上句、下句の両方に掛かり、「おのれだけ」という意味で岩のように心を動かそうとしてくれない相手にむかって砕け散る波と片想いの心を指している。したがって孤独は名詞としてではなく、副詞的に「砕けて」を修飾する必要がある。

G 訳では「物を思ふころかな」を "I dream of days gone by" と訳している。この訳出は百人一首の挿話以降の「『このとおり僕は無邪気に昔をなつかしむことさえできる』」（205）という呟きと関連している。確かに G 訳は過去を夢想する 24 章での清顕の心情との整合性はある。また述懐歌として再解釈された（吉海, 1993）48 番訳として G 訳の過去志向的な訳出は誤訳だとは断定できない。[11] とはいえ、波・岩・風の関係性、「お

[11] Watson（2012）は、Rocks engulfed And wracked by waves / Then smashed to pieces- / An aching wind, / A time recalled. と G 訳と同じく述懐歌として翻訳している。斎藤（1909）でも、Lash'd by the gale / The madded sea breaks on the rocks / E'en so my heart / forlorn and drear / Doth breaks agains the heart mocks / In wild despair this time of year と述懐歌に翻訳している。

のれのみ」の訳出について考える限り、ST 読者が清顕と聡子の恋愛関係に関して受けとる情報と TT 読者のそれには等価関係がない。よって G 訳の和歌の翻訳は引喩として働くには十分ではない。

2.2.2 48 番　ポーター訳

ST	TT
風をいたみ 岩うつ波のおのれのみ 砕けて物を 思ふころかな	1 The waves that dash against the rocks 2 Are broken by the wind 3 And turned to spray; my loving heart 4 Is broken too, I find, 5 Since thou art so unkind.

3 行目の “spray”（飛沫）により粉々になって飛び散る恋心の断片が重なり豊かな視覚イメージが悲壮感を増している。5 行目で原句では暗示されているに過ぎない女（岩）の性質 “unkind” を翻訳者が明確にすることで隠喩の説明を補足した。P 訳では「暗示的表現から明示的表現への拡大」により、隠された意味内容が TT 読者にも伝わるだろう。5 行目 “unkind” は、2 行目 “wind”、4 行目の “find” との脚韻を揃えるための語だが、この語により意味は犠牲になっていない。むしろ、和歌の形式の再現が内容とも合致する結果に繋がっていることで F-E、D-E の均衡が取れている。

2.2.3 48 番　本多訳

ST	TT
風をいたみ 岩うつ波のおのれのみ 砕けて物を 思ふころかな	1 As the wind-driven billows shriek 2 Against the rocks and vainly break, 3 So, though to win you hard I seek, 4 You'll not be shaken for my sake.

G 訳では看過された波の原因となる風が 1 行目で訳出されている。3,4 行目で “I” の努力が水の泡になる未来が示唆され「これからもあなたの心は揺れることはない。」と恋愛成就の可能性を否定した。このような「物を思ふころかな」の明示化により本多は和歌を実際の恋愛感情に落としこんだ。また H 訳は、原歌 [mi] 音の繰り返し m<u>o</u>n<u>o</u>w<u>o</u> <u>o</u>m<u>o</u>u k<u>o</u>r<u>o</u> の母音 [o] 音の響き、[no] 音という繰り返しを、[sh][s] 音によって意図的に再現していると推測できる。そしてその [sh][s] 音が翻訳では風波を連想させるのだ。

2.2.4 48 番　マクミラン訳

ST	TT
風をいたみ 岩うつ波のおのれのみ 砕けて物を 思ふころかな	1 Blown by the fierce winds 2 I am the waves that crash 3 Upon your impervious rock 4 Though my heart shatters, 5 my love rages yet[12]

1 行目に自制できない恋風に吹かれて狂恋に奔走する読み手が明示的に訳出され、風と波の因果関係が提示されていない G 訳よりも理解しやすい。「水を通さない」「感情を受け付けない」性質を表し岩と人間両者に適用できる “impervious” を使用し隠喩の写像関係を言語化した。4,5 行目は下の句を意気消沈する物思いと捉える大多数の解釈と相違がある。とは言うものの、鈴木（1977,ibid.）の解釈である「男が女に性懲りも無く挑む趣向」が TT 読者にも伝わる。D-E 訳に徹し荒波の意味要素「執念」「連続性」などを 4 行目の “Though”、5 行目 “yet” により TT に反映している。M 訳では「暗示的表現から明示的表現への拡大」が行われたことで、波・岩・風の関係性を難なく理解できる。

2.2.5 48 番のまとめ

ST の情報が比較した英語翻訳でどのように伝達されているかを以下にまとめる。これらの結果を照らし合わせると、TT 読者にも ST 読者と同様の反応が望める訳は岩と波の性質を説明し隠喩を明確にした H 訳と M 訳ということになる。

[12] McMillan（2008）では In the fierce wind / the waves beat upon, / but are held by rocks. / Yet my beloved will not brake / these turbulent thoughts of love / pounding upon my heart. と訳出している。4 行目で岩に喩えられた女性は恋に歯止めをかけないと訳出している。女側がいかにも、恋に肯定的であり、読み手は全く悲観していない事で原歌との相違がみられる。そして、砕ける波の状態と読み手の心情が相関関係にない。この序詞を否定したような訳出は誤訳と言っても過言ではない。よって、この初版 McMillan（2008）に比べて、G 訳は誤訳の程度が低い。2017 年版では 2 行目に波のメタファーを明確にした。さらに “rock” を複数形から単数形に変更したのは、読み手の恋する女性を限定化し、“rock” を擬人的に表現するためだろう。また、2017 年版では代名詞 “I” と所有格 “your” で双方の関係性の乖離を明確にし、原句の「おのれのみ」を強調させた翻訳にしている。

表 1　48 番 4 訳の比較

ST	G 訳	P 訳	H 訳	M 訳
風	I feel the wind's keen force（“I” が感受する風として）	The waves that dash against the rocks / Are broken by the wind（波を鼓舞する風として）	As the wind-driven billows shriek（風を鼓舞する波の形容詞として）	Blown by the fierce winds（波を引き起こす風として）
岩	なし	Since thou art so unkind（優しくない）	You'll not be shaken for my sake（私のために心を揺さぶらない女）	your impervious rock（水を通さない岩、人を寄せ付けない女）
波	なし	my loving heart / Is broken too, I find（悲壮感を訴えている）	So, though to win you hard I seek,（女の獲得にもがく）	I am the waves that crash / Upon your impervious rock（執着心を持っている）
隠喩	なし	あり（my loving heart Is broken too, I find, 波と “I” の関係を明示化）	あり（As で直喩的に説明する明示化）	あり（I am the waves that crash 明示化による訳出）

3 49 番歌について

本節では 49 番歌「みかきもり衛士のたく火の夜はもえ昼は消えつつ物をこそ思へ」の考察を行う。現代語訳は「みかきもりである衛士のたく火が夜は燃えて昼は消えているように、恋に悩む私も、夜は燃え昼は消え入るばかりの毎日で、もの思いに沈んでいるのです。」（島津, 1969:110）となる。49 番では昼と夜の時間の中で恋の高揚と消沈が描かれそれが反復の「つつ」によって繰り返される（吉海, 1993）。また対句表現部分である昼夜の転換が、意気消沈したり、恋焦がれたりする繰り返しを意味すると共に、夜と昼とではあたかも別人に思えるような恋心の不可思議な苦しみを暗示する（鈴木 et al.,2003）。3.1 節では火の表象とともに紡ぎ出される聡子の人生と 49 番を重ね合わせ物語を時系列で追いたい。続く 3.2 節では、3.1 節を踏まえて英訳 4 作品の比較を行う。

3.1 聡子と 49 番歌の関係性について

聡子の人生の局面で彼女の感情は火のメタファーを用いて描写される。(1) 清顕と接吻を交わす前の忍恋「昼」、(2) 雪見「夜」、(3) 勅許後の逢引「夜」、(4) 出家と剃髪「昼」、(5) 本多の来訪「昼」と時系列に聡子の心情を追うと 49 番歌の昼夜の転換が引喩とし

て作用していることに気づく。49 番歌が挿入されたのは 24 章のみであるが小説を読み終わった読者は、49 番の恋愛関係が小説全体の聡子の人生に影響していることに気づく。

(1) 忍恋「昼」: 清顕に恋心を示さない聡子の隠された内面は侍女蓼科の口から明らかになる。「…しかも若様の前では、露ほどもお顔にお出しにならぬように、どんなに健気にお力め遊ばしたか。私の入知恵で、新年の御親戚会で、思い切って殿様に直々お尋ねの上、どんなに御安心遊ばしたか。それからというものは、ただ昼も夜も若様のことばかりお考えになり、とうとう思い切って、雪の朝、女子のほうからお誘い申上げるような面映ゆいことまで遊ばしながら、しばらくは世にもお仕合わせそうに、夢の間にも若様の御名をお呼び遊ばす。…」(225)。下線部の蓼科の告白から、聡子は昼も夜も清顕のことを想っていたが、その想いを内に秘めてきたことがわかる。[13] この聡子の好意が、49 番の火のメタファーと符合する。

(2) 雪見「夜」: 27 章では聡子の方から突然清顕を雪見に誘う。幌で初めて清顕に接吻した聡子は下線部のように火の縁語で形容されている。「急に聡子の中で、炉の火がひらかれたように火勢が増して、ふしぎな焔が立上って、双の手が自由になって、清顕の頬を押えた。その手は清顕の頬を押し戻そうとし、その唇は押し戻される清顕の唇から離れなかった。」(232) このように聡子の官能性を異なる火の比喩を用いて描写している。49 番では夜に衛士がたく火の燃え上がりが恋の情熱を指している。『春の雪』では、聡子の清顕に対する恋心の燃え上がりは 49 番歌の夜の火と重なる。上記の箇所は、聡子の感情の燃え上がりと 49 番の火の燃え上がりが呼応するため引喩だと考えられる。

(3) 勅許後の逢引「夜」: 聡子は鎌倉での逢瀬から東京へと帰る。車を手配した清顕の友人、本多は隣に座る聡子をこう描写する。「聡子の目にはまだ放恣な火の名残があったが、髪は一筋の乱れもなく整えられていた。」(294) 聡子の目は火に喩えられている。御輿入れが決まっても尚、清顕と逢瀬を重ね聡子は御上の勅許を裏切る立場となってしまう。49 番の篝火は宮中の諸門を警護する。言うなれば忠誠を表す火である。ところが、物語上では天皇を裏切る不義を意味する火に成り代わっているのだ。これは三島が小説上に仕組んだ 49 番の火の意味を反転させるという皮肉（irony）であり聡子の役割と本能の乖離を示す指標ではないだろうか。[14] 宮家に嫁ぐための人生を歩んできた聡子が勅許に背く皮肉な展開が、49 番の引喩を理解することで強調される。

(4) 出家と剃髪「昼」: 49 番歌は時間に束縛される火を描き時間に伴う恋愛感情の変容

---

[13] 火の消滅に関しては、意気消沈と忍恋の解釈があるが、野木（1982),Mostow（1996）は、後者の忍恋の意味だと捉えている。

[14] 大森文子教授に解釈のご教示をいただきました。

を主題としている（吉海, 1993）。49 番の「昼」の訪れは、聡子にとっては出家を指し、昼が訪れることで恋の炎も鎮火されてしまう。次の場面では、49 番の時間の経過が、引喩として用いられている。44 章で綾倉夫人は門跡寺院の月修寺を訪れてお輿入れの口上を述べる。月修寺で一泊し帰京する予定が聡子は御髪を下ろしてしまう。母親は御髪を下ろした娘の目に奇怪な曙をみるのだった。「…その瞳には小さく蝋燭の焔が揺れているのに、その目の白いところには、暁の白光がすでに映っていた。夫人は娘の目の中から、射し出したこのような怖ろしい曙を見たことはない。聡子が指にからませている水晶の数珠の一顆一顆も、聡子の目の裡と同じ白みゆく光りを宿し、これらの意志の極みに意志を失ったような幾多のすずしい顆粒の一つ一つから一せいに曙がにじみ出ていた。」（395－396）この箇所では聡子の白目を空に、瞳を太陽に喩えている。昼の火の消滅と聡子の出家が符合する。つまり太陽が夜明け（「曙」「白光」「白みゆく光り」に象徴される）を告げたため瞳の光は輝きを増したのだ。昼の訪れによって消滅する火と、出家の手筈を次々と整えていくことで世俗での命が消滅する聡子は 49 番を引喩とすることで共通性を持つのだ。

(5) 本多の来訪「昼」：月修寺で清顕が聡子との面会を拒絶された後、本多が門跡に面会を直談判する。その時忍笑いが聞こえたような気がしたが、思い直して女の忍泣きではないかと本多は推測する。「…幽かに紅梅の花のひらくような忍び笑いをきいたと思った。しかしすぐそれは思い返されて、若い女の忍び笑いときかれたものは、もし本多の耳の迷いでなければ、たしかにこの春寒の空気を伝わる忍び泣きにちがいないと思われた。強いて抑えた嗚咽の伝わるより早く、弦が断たれたように、嗚咽の絶たれた余韻がほの暗く伝わった。」（460）「若い女」とは聡子であろう。余韻は本来聴覚で感知するが本多は視覚で明暗を捉えるように共感覚的に嗚咽を知覚している。嗚咽の残響はもう現世では二度と会わないと誓った清顕への恋心の余韻と解釈できる。49 番の火の解釈は大きく分けて二つの解釈があることを前述した。一つ目は消沈、二つ目は忍恋の意である。ここでも、後者の「忍恋」の象徴として引喩が働いている。49 番の下火になった昼の残り火の情景に託して、出家した聡子が清顕への恋心を隠さなければいけない状況を語らせているのだ。[15]

このように 49 番を引喩として聡子の恋を段階的に表現していることがわかる。

3.2 49 番歌の比較

次に 49 番の英訳比較に移る。49 番の訳出を観察する際には次の三つの事柄に注目す

[15] 大森文子教授に 49 番との関連性を示唆していただきました。

るべきだろう。昼の鎮火、反復の「つつ」、さらに異文化要素「御垣守の衛士」である。目標言語において「御垣守」「衛士」に馴染みがなく、「衛士」[16] と英語圏の “guards”（護衛）は似て非なるものであることから訳出には十分注意を払う必要がある。

3.2.1 49 番　ギャラガー訳

ST	TT
みかきもり	1 When day gives way to night
衛士のたく火の夜はもえ	2 And guards kindle fires
昼は消えつつ	3 The thoughts of other times
物をこそ思へ	4 Come alive within me

G 訳では「燃え」「消え」の対句表現が成立していない。さらに形式の破壊は意味伝達の失敗につながることもある（Nida,ibid.）。49 番の場合、対句表現部分である昼夜の転換が、悲しみと喜びを繰り返す恋心の不可思議な苦しみを暗示する（鈴木 et al.,2003）。この感情の起伏は、3.1 節で言及したように聡子の恋愛感情と密接に関わる要素でもあるため訳出されるべきだ。「御垣守の衛士」の訳出についてはどうだろうか。G 訳では「適合」[17] の翻訳技法をとり、概ね等価である文化機能をもつ “guards”（護衛）を用いた。異なる文化背景を持つ読者に対する配慮はあるものの、3.1 節（3）で言及したように皇室と密接に関係のある『春の雪』においては「御垣守の衛士」の意味要素を TT 読者も享受するべきだ。「皇居」「篝火」「昼の火の消滅」など伝達されない内容が多い G 訳は結果として聡子の心情を深く理解する引喩の効果を弱めた。また 3,4 行目で「物をこそ思へ」を述懐歌として訳したことにより既に恋の苦しみを乗り越えたような柔和な印象に抑えている。[18]

3.2.2 49 番　ポーター訳

ST	TT
みかきもり	1 My constancy to her I love
衛士のたく火の夜はもえ	2 I never will forsake;
昼は消えつつ	3 As surely as the Palace Guards
物をこそ思へ	4 Each night their watch-fire make
	5 And guard it till daybreak

[16]「衛士は令制の諸国軍団から毎年（のちに三年）交替で上京し、衛門府・左右衛士府に配属された兵士。火をたいて夜を守るのが衛士の職務の一つだった。」（島津 ,1969:110）
[17] 適合（adaption）とは、異文化要素に対し等価である文化機能を持つ異なった事柄を用いることである。
[18] 斎藤（1909）でも、恋愛歌としてではなく、A Porter at the Palace Gate / Keeps watch and ward beside the fire. / That burns and blazes through the night, / And in the daytime dies the pyre; − / So doth my heart that sorrows blight. と述懐歌として翻訳している。“fire” と “pyre” の形式的な等価は、内容を犠牲にせず、原歌の視覚イメージをより豊かにしている。“blight” は皮肉にも “bright”（明るい）を連想させる。

P 訳では 1,2 行目で不変の愛を訳出し “I” の強い愛情に注目した。[19] 責任を要する護衛の職業的な意味合いに着想を得て恋を死守する読み手の決意を訳出しようとした。護衛の忠誠を同格の “as” で繋ぎ恋の相手に対する忠誠と重ねている。しかしこの訳出は原句に存在しない写像関係である。対句表現に関してだが、P 訳は G 訳と同様「夜明けまで篝火で護衛する」と暗示的に「昼の鎮火」を伝達しただけだ。5 行目の “daybreak” で脚韻を踏み、F-E を達成した結果対句が消滅し TT 読者に「昼の鎮火」は伝達されない。短歌の形式に不慣れな TT 読者のため形式で 2,4,5 行目の脚韻を踏む方法で原詩形に似たところを残そうとした P 訳だが（Porter,1909）F-E 訳に拘泥したことで内容を犠牲にしている。

3.2.3 49 番　本多訳

ST	TT
みかきもり	1 Like watch fires burning bright to light
衛士のたく火の夜はもえ	2 The men who guard the palace ground,
昼は消えつつ	3 My bosom glows aflame by night,
物をこそ思へ	4 And wastes by day in grief profound.

1,2 行目は「赤々と燃えて宮中を守る男たちを照らす篝火のように」から始まる。3 行目との脚韻を合わせ、音韻的な F-E を目指そうとしたのだろうか。Nida（ibid.）は形式を尊重すれば、内容を犠牲にすると述べたが、H 訳では “light” で脚韻を踏み「衛士を照らす」という余分な情報が追加された。だが、「御垣守の衛士」の訳出は正確だ。「対応」[20]（Vinay,J.-P.& Darbelnet,J.,1995）を用い ST 読者が受け取る「篝火」「皇居の警備」「護衛」という情報が TT 読者にも伝達された。さらに 4 行目の “wasted” は火と身の消滅を多義的に表すため ST と同等の情報が TT 読者に伝わる可能性は高い。また本多が火の消滅を意気消沈する読み手の心情だと解釈していることがわかる。よって恋に対する消極性を訳出した H 訳と次に言及する積極性を訳出した M 訳は両翼に位置する。

[19] Watson（2012）では、By the Royal Gate / The guards’ fire / Burns by night and / Blows out by day: / I think of you と P 訳と同様に 5 行目に恋愛感情を明示し D-E を達成している。さらに、b 音の頭韻を合わせた上で対照法（antithesis）を再現し形式的にも原歌に近づけようとしたと考えられる。
[20] 対応（equivalence）とは、異なる品詞やパラフレイズを用いて文化的な要素を TT 読者にもわかる形で翻訳することである。

3.2.4 49 番　マクミラン訳

ST	TT
みかきもり	1 This troubled heart of mine
衛士のたく火の夜はもえ	2 is like the watch fire of the guards
昼は消えつつ	3 of the palace gate −
物をこそ思へ	4 It fades to embers by day,
	5 But blazes up again each night.

P 訳同様に M 訳でも原文の構造を改変し 1 行目から「物をこそ思へ」を翻訳した後 1,2 行目で原句の序詞と本旨の関係性を直喩に変形させた。形式（対句）が意味内容の伝達に寄与すると気づいてか、TT でもそれを再現している。注目に値するのは “embers” である。M 訳は火の消滅を悲恋に対する意気消沈と捉える 49 番の通説と異なるが「燃えさし」「恋の余韻」を意味する多義語で恋の火が鎮火することは一時もない事を暗示したのだ。5 行目では、反復の「つつ」を “again”, “each” により訳出し火の消滅と再燃が TT 読者にも伝わる。[21] さらに、原句にま行は 5 回見られ、「燃えて物を思ふ」の hypogram になっているが、この音韻効果の写しは “gate”, “faded”, “day”, “blaze”, “again” の [ei] 音 5 回の繰り返しに見られる。

3.2.5 49 番のまとめ

49 番の ST の情報が、比較した英語翻訳でどのように伝達されているかを表 2 にまとめた。これらの結果を検討すると ST で暗に提示された情報の等価が見られたのは M 訳である。この結果は歌の形式に囚われない D-E 的な訳出と ST の深い理解に起因している。

[21] McMillan（2008）では The watch fires of the palace guards / blaze by the gates at night / become embers in the day / like my love / which wanes by day / and burns by night. と訳出している。反復表現「つつ」が、現在形の動詞を使用することで再現されていたが、マクミラン（2017）では、明確に灯火と鎮火が繰り返し続き一日だけでは終わらないことを示した。

表 2　49 番 4 訳の比較

ST		G 訳	P 訳	H 訳	M 訳
昼はきえ		なし	なし	Wastes by day in grief profound. （昼には深い悲しみに消える）	Is fades to embers by day. （昼には残り火と化す）
対句		なし	なし	glows aflame/ wastes	It fades to embers/ blazes up
つつ		なし	Each night（夜毎）	なし	each night（夜毎）
御垣守	皇居	なし	the Palace Guards （皇居の護衛）	the palace ground（皇居の地）	The palace gate（皇居の門）
	篝火	なし	Their watch-fire （彼らのかがり火）	Watch fires （かがり火）	The watch fire of the guards （衛士達のかがり火）
隠喩		なし	あり（誤訳）	あり（誤訳だが、直喩による明示化）	あり（直喩による明示化）

4 結論

本稿では、G 訳と他の百人一首の英訳を詳細に比較することにより、考察を進めてきた。その結果、以下のような結論が得られた。

RQ1. G 訳の百人一首の訳出は『春の雪』の清顕、聡子の恋愛感情の理解に十分寄与していないため TT では引喩（allusion）としての効果を保っていない。48 番では風と波の相関関係、波と岩の性質が訳出されていない。また、48 番の下の句の訳出と 24 章の清顕の心情には一貫性があるものの恋煩いを訳出していないことにより恋愛歌としての色合いが薄れた。よって G 訳を読んだ TT 読者は清顕と聡子の恋愛関係との重層性を察知できない可能性が高い。よって百人一首の訳から両者の関係を喚起させる「動的等価」が果たされていない。49 番では「昼は消え」が明示的に翻訳されず聡子の人生における鎮火の意味合いが TT では伝達されていない。形式（対句）の等価、機能の等価どちらも果たされていないともいえる。さらに上句の異文化要素の削除により三島の仕組んだ皮肉が TT では伝わらないだろう。

RQ2. G 訳では達成されなかった D-E 訳がいくつかの他訳で成功していた。例えば、G 訳と異なり 48 番 H,M,P 訳では風、波、岩の相関関係が訳出されていた。G 訳は、述懐歌として翻訳されたが、他訳では恋愛歌として明示的に翻訳することで、和歌が恋愛関係を示すという理解を促す等価が見られた。49 番に関しては、H 訳、

M 訳で、G 訳には見られなかった原歌の対句が訳出されていた。さらに比較対象とした三訳で異文化要素を省略せずに、「皇居の篝火」であるという理解を促す D-E 訳が達成されている。

本稿では『春の雪』英訳版に引喩された百人一首 48 番、49 番の訳出について考察した。和歌の翻訳は “disasters” だという Keene の指摘の意味が本比較考察により明らかになった。百人一首 48 番、49 番の訳出は、『春の雪』のほんの数行にしかすぎない。しかしこの作品の根幹となる主人公の恋愛感情の理解を左右するのだ。Nida のいうように、ST と TT 読者のテクストの反応は同じでなければならない。よって、和歌の文化に慣れ親しんでいない読者のためには、翻訳者の深い理解と明確化を含んだ親切な翻訳が必要である。

引用文献

三島由紀夫（2012）『春の雪』新潮社（出版年は 1969 年）

Mishima,Y.（1990）.*Spring Snow*.Gallager,M.（Trans.）.New York:Alfred AKnopf,Inc.（Original work published 1972）.

参考文献

Honda,H.（1956）.*One Hundred Poems from One Hundred Poets-Being a Translation of the Ogura Hyaku-nin-Isshu,*The Hokuseido Press.Tokyo.

Keene,D.（1972）.Mishima's Monument to a Distant Japan,*The Saturday Review*, pp.57-59.（June. 10,1972）.

Larry,W.（2015）.*Unbinding the Japanese Novel in English Translation, The Alfred A. Knopf Program,1955-1977*.Department of Modern Languages Faculty of Arts University of Helsinki.

McMillan,P.（2008）.*One Hundred Poets, One Poem Each- A Translation of the Ogura Hyakunin Isshu,*Columbia University Press,New York.

Mostow,J.S.（1996）.*Pictures of the Heart-The Hyakunin Isshu in Word and Image.* University of Hawai'I Press.

Nida,E.（1964）.*Towards a science of translating*,Leiden:Brill

Porter,W.N.（1909）.*A Hundred Verses from Old Japan-being a translation of the Hyaku-nin-isshiu,* Oxford,Clarendon Press .

Ryan,M.（1974）. “The Mishima Tetralogy”（Review）*Journal of Japanese Studies* 1（1）: 65-173.

Vinay,J. -P.& Darbelnet,J.（1995）.*Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation*,Sager, J.C and Hamel,M.J.（Ed. and Trans.）Amsterdam & Philadelphia : John Benjamins Publishing Company.（Original work published 1958）.

Watson,F.（2012）.*One Hundred Leaves:A new annotated translation of the Hyakunin Isshu* Plum White Press.Kindle 版 .

カーロイ・オルショヤ（2018）「『百人一首』の英訳史－ 1984 年からの訳を中心に」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』18 号 , 85-104.

斎藤秀三郎（1909）『百人一首：句々対訳』興文社

島津忠夫（1969）『百人一首』角川書店

鈴木知太郎（1977）『百人一首』桜楓社

鈴木日出男・山口慎一・依田泰（2003）『原色　小倉百人一首』文英堂

瀬戸賢一（2002）『日本語のレトリック』岩波書店

ナイダ・E.A.（1973）『翻訳学序説』成瀬武史訳 開文出版

野木可山（1982）『百人一首考』四季書房

マクミラン・J・ピーター（2017）『英語で読む百人一首』文藝春秋

マンデイ・ジェレミー（2009）『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳 みすず書房

三島由紀夫（2017）『告白 三島由紀夫未公開インタビュー』講談社

吉海直人（1993）『百人一首の新考察―定家の選歌意識を探る―』世界思想社